

福井県埋蔵文化財調査報告 第164集

# 上蔵垣内遺跡

— 県営かんがい排水事業 東江地区に伴う調査 —

2 0 1 7

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

## 序 文

本書は、県営かんがい排水事業東江地区に伴い、平成25年度に実施した上蔵垣内遺跡発掘調査の成果をまとめた報告書です。

上蔵垣内遺跡は坂井市坂井町蔵垣内・五本・上関にかけて広がる水田地帯に立地する遺跡で、過去には平成21・22年度にも発掘調査を実施しています。

今回の調査で検出した遺構は自然河川や溝が主で、溝は基本的に自然河川につながる用排水路であったと考えられます。出土した遺物には縄文時代晩期、弥生時代中・後期、古代、中世、近世の各時代の土器や陶磁器などがあります。

今後、本書の調査成果が広く公開・活用され、埋蔵文化財に対するご理解と、郷土の歴史に対する興味をより一層深める端緒となれば、誠に幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで、関係諸機関や地元の方々をはじめとする多くの皆様方から、あたたかいご支援とご協力を賜りましたことに、心より感謝申し上げます。

平成29年 3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

所 長 工 藤 俊 樹



## 例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが、県営かんがい排水事業東江地区に伴い、平成25年度に実施した上蔵垣内遺跡（福井県坂井市坂井町五本・上関所在）の発掘調査報告書である。
- 2 上蔵垣内遺跡の調査は坂井農林総合事務所の依頼を受けて、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、中森敏晴、野路昌嗣、宮崎認、木村茉莉、秋山綾子が担当した。
- 3 発掘調査は、平成25年11月1日から同年12月27日まで実施した。出土遺物の整理作業は、平成27年4月1日から平成29年3月31日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 4 本書の編集は中森があたり、赤澤徳明、山本孝一と分担して執筆した。文責は以下のとおりである。  
中森 第1章～第3章第2節、第3章第3節4・5、第4章 山本 第3章第3節1・2  
赤澤 第3章第3節3
- 5 上蔵垣内遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬がある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 6 挿図および表の作成は各執筆者がおこない、遺構挿図作成を鈴間智子が、遺物挿図作成を吉田桂子がそれぞれ補佐した。写真については1・3区遺構を宮崎が、それ以外を中森が撮影し、写真図版は中森が作成した。
- 7 本書に掲載した調査区測量図は、株式会社サンワコンに委託して作成した。
- 8 包丁の保存処理および木製柄部の樹種同定は、平成27年度に株式会社文化財サービスに委託し、実施した。その結果報告の一部を中森が加筆・編集し、第3章第3節5（金属製品の項）として掲載した。
- 9 写真図版・挿図・表などの遺物番号は符合する。写真の縮尺は不同である。
- 10 本書における水平レベルの表示は海拔高（m）を示し、方位は座標北を用いた。X・Y座標値は国土方眼座標系第VI系（世界測地系）に基づく。
- 11 1・3・4図の作成にあたり、国土地理院5万分1地形図「福井」（平成16年5月1日発行）・「三国」（平成3年3月1日発行）、同2万5千分1地形図「三国」（平成21年3月1日発行）、同2万5千分1土地条件図「福井」（平成16年5月1日発行）を一部改変して使用した。
- 12 本書で用いた遺構の略記号は以下のとおりである。  
自然河川：SR、溝：SD、土坑：SK、ピット：SP
- 13 遺構の土層色調は、小山正忠・竹原秀雄 編『新版 標準土色帖』に拠る。
- 14 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 15 発掘調査に際しては、下記の機関から協力を得た（敬称略）。  
十郷用水土地改良事務所
- 16 発掘調査には地元の方々の参加・協力を得た。また、遺物整理作業は福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があたった。

## 目 次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 遺構と遺物	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 遺構	7
第3節 遺物	16
第4章 まとめ	22

## 写真図版目次

図版第1	遺構 (1) 1区南半部全景(南より) (2) 1区北半部全景(南より)
	(3) 2区12・13グリッド全景(北より) (4) 2区14～19グリッド全景(北より)
図版第2	遺構 (1) 2区20～27グリッド全景(北より) (2) 2区28～35グリッド全景(北より)
	(3) 3区全景(北より)
図版第3	遺物(土器) 土師器・須恵器・土師質皿・陶器・磁器
図版第4	遺物(土器・石器・金属製品) (1) 縄文土器・弥生土器 (2) 石鏃 (3) 包丁

## 挿 図 目 次

第1図	上蔵垣内遺跡調査区位置図	1
第2図	グリッド配置図	2
第3図	上蔵垣内遺跡周辺地形図	3
第4図	上蔵垣内遺跡と周辺の遺跡分布図	5
第5図	調査1・2区全体図	9・10
第6図	1区遺構実測図	11
第7図	2区12～23グリッド遺構実測図	12
第8図	2区24～35グリッド遺構実測図	13
第9図	2区SD6・10・12・15・16・18・19・22実測図	14
第10図	2区SK2～8、SP1・3実測図	15
第11図	縄文土器・弥生土器実測図	17
第12図	土師器・須恵器実測図	19
第13図	土師質皿・陶器・磁器実測図	20
第14図	石鏃・包丁実測図	21

## 表 目 次

第1表	1区自然河川・溝一覧表	8
第2表	2区自然河川一覧表	8
第3表	2区溝一覧表	8
第4表	2区主要土坑・ピット一覧表	8
第5表	縄文土器・弥生土器出土地点一覧表	18
第6表	土師器・須恵器・土師質皿・陶器・磁器一覧表	20

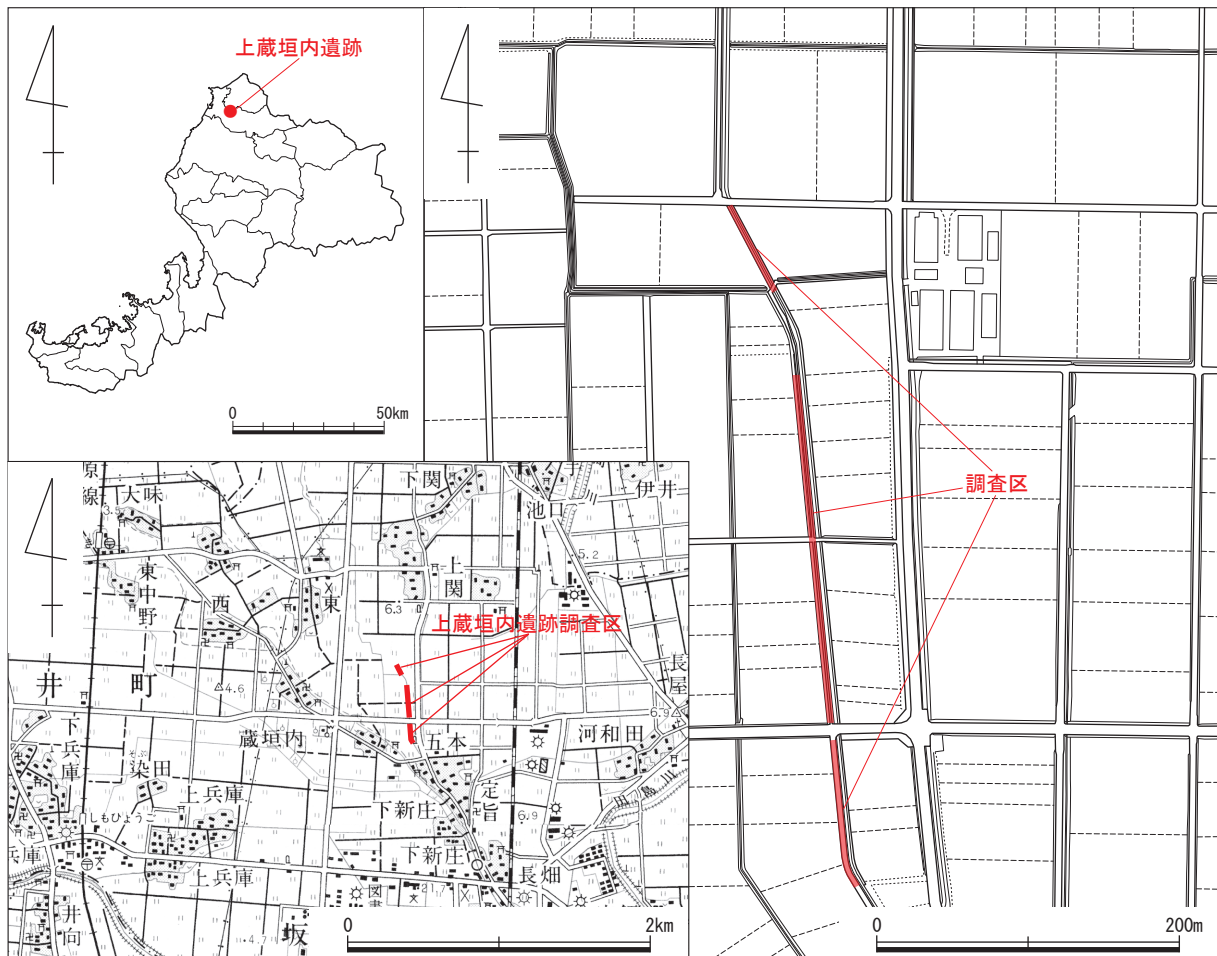
# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯（第1図）

福井県の最北部に展開する坂井平野<sup>さかいへいや</sup>は広大な水田や畑作地を抱える県内有数の農業地帯で、その坂井平野一円を潤し、農産の根幹を支える重要なかんがい幹線水路が十郷用水<sup>じゅうこうようすい</sup>である。しかし、近年では施設老朽化による維持管理負担の増大、人口増加・都市化に伴う水質悪化、慢性的な用水不足など、様々な問題が噴出してきた。それらの課題を解消するため、用水路をパイプライン化して、配水管理の合理化を図り、用水の再編と安定供給を目指すかんがい排水事業が目下推進されている。

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文）は坂井農林総合事務所の依頼を受け、あわら・坂井両市にかかる東江地区<sup>ひがしえ</sup>を対象とするかんがい排水事業の実施によって影響を受けるおそれのある複数の遺跡<sup>さかいしざかいちようくらがいち</sup>について、試掘調査を随時実施した。このうち、坂井市坂井町蔵垣内<sup>ごほん</sup>・五本<sup>かみぜき</sup>・上関にかけて展開する上蔵垣内遺跡<sup>かみくらがいちいせき</sup>について、平成22・23年（2010・2011）に依頼（平成22年9月6日付け坂農総第3170号、同23年9月20日付け坂農総第4068号）を受けて試掘調査を実施した結果、弥生・平安時代に属する遺物を検出し、五本・上関地籍の総面積1,330㎡について本格調査が必要となる旨を回答した（平成22年12月10日付け埋文第12-34号、同23年11月1日付け埋文第3-36号）。

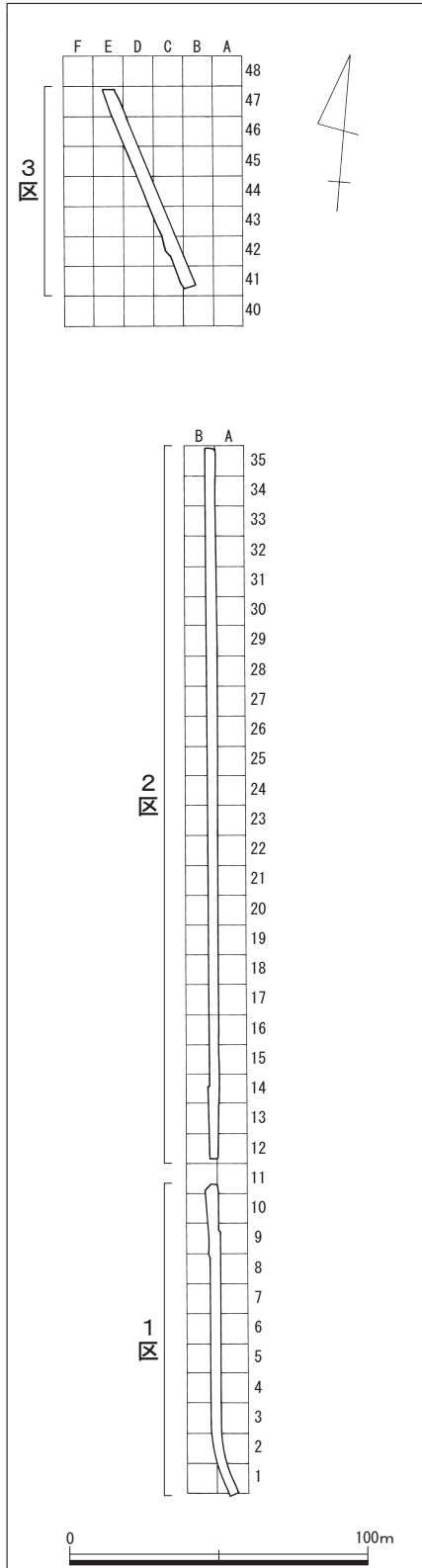
この回答を受けて、坂井農林総合事務所は福井県教育庁生涯学習・文化財課に本格調査を依頼、県埋文も交えた協議の結果、平成25年度に調査対応することで合意し、調査計画が確定した。



第1図 上蔵垣内遺跡調査区位置図（左上：縮尺1/2,500,000、左下：縮尺1/50,000、右：縮尺1/5,000）

第2節 調査の経過（第2図）

調査区の調査前の状況は市道・農道および用水路で、南から市道部、農道部、用水路部に三分されることから、市道部を1区、農道部を2区、用水路部を3区とした。調査区の形状はパイプラインの延長線上の一部であるため、その線形のままだに長方形を呈し、規模は南北総延長390m、東西幅3～5m、



総面積1,330㎡（1区：100m×3m=300㎡、2区：210m×3m=630㎡、3区：80m×5m=400㎡）を測る。

調査区には一辺10mの方形グリッドを設定し、東から西方向にA～F、南から北方向に1～48の記号を付し、各グリッド名とした（第2図）。

現地調査は平成25年（2013）11月1日より開始した。期間が2ヶ月と短い上に折悪く荒天が続いたため、進捗は難渋を極めたが、同年12月27日に調査を終了した。また、1区と2区間の市道部分（10m×2.78m=27.8㎡）は、平成26年（2014）1月21日に工事立会に対応したが、遺構・遺物とも検出しなかった（平成26年1月20日付け坂農総第211号で依頼、同年2月3日付け埋文第11号で回答）。

以下、主に2区調査日誌を抄録する。

- 11月13日 現場作業開始、コンベア等器材を設置。
- 11月14日 排水溝を掘削後、遺構精査開始。
- 11月18日 12・13グリッドで自然流路（SR1）検出。  
～この頃より年末まで悪天候が続き、進捗が滞る～
- 11月25日 12グリッドでSR1両岸を検出。
- 11月27日 12・13グリッド完掘、写真撮影。
- 12月3日 12～19グリッド以南完掘、全景写真撮影。
- 12月5日 20グリッド以北の状況を確認するため、グリッドごとに東西方向トレンチを設定・掘削。
- 12月9日 25グリッド以北、遺構精査・掘削。黄褐色地山に黒色覆土の遺構で25グリッド以南とは様相が異なる。
- 12月11日 1区調査終了。
- 12月16日 20～26グリッド遺構掘削。
- 12月17日 2区完掘。
- 12月18日 2・3区全景写真撮影、のち空中撮影。
- 12月19日 道具洗浄、後片付け。
- 12月24日 発掘道具等、公用車で分室へ運搬、プレハブ等を掃除。
- 12月26日 器材・ユニットハウス等撤収開始。
- 12月27日 器材・ユニットハウス等撤収完了、現地調査を終了する。

第2図 グリッド配置図（縮尺1/2,500）



## 第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

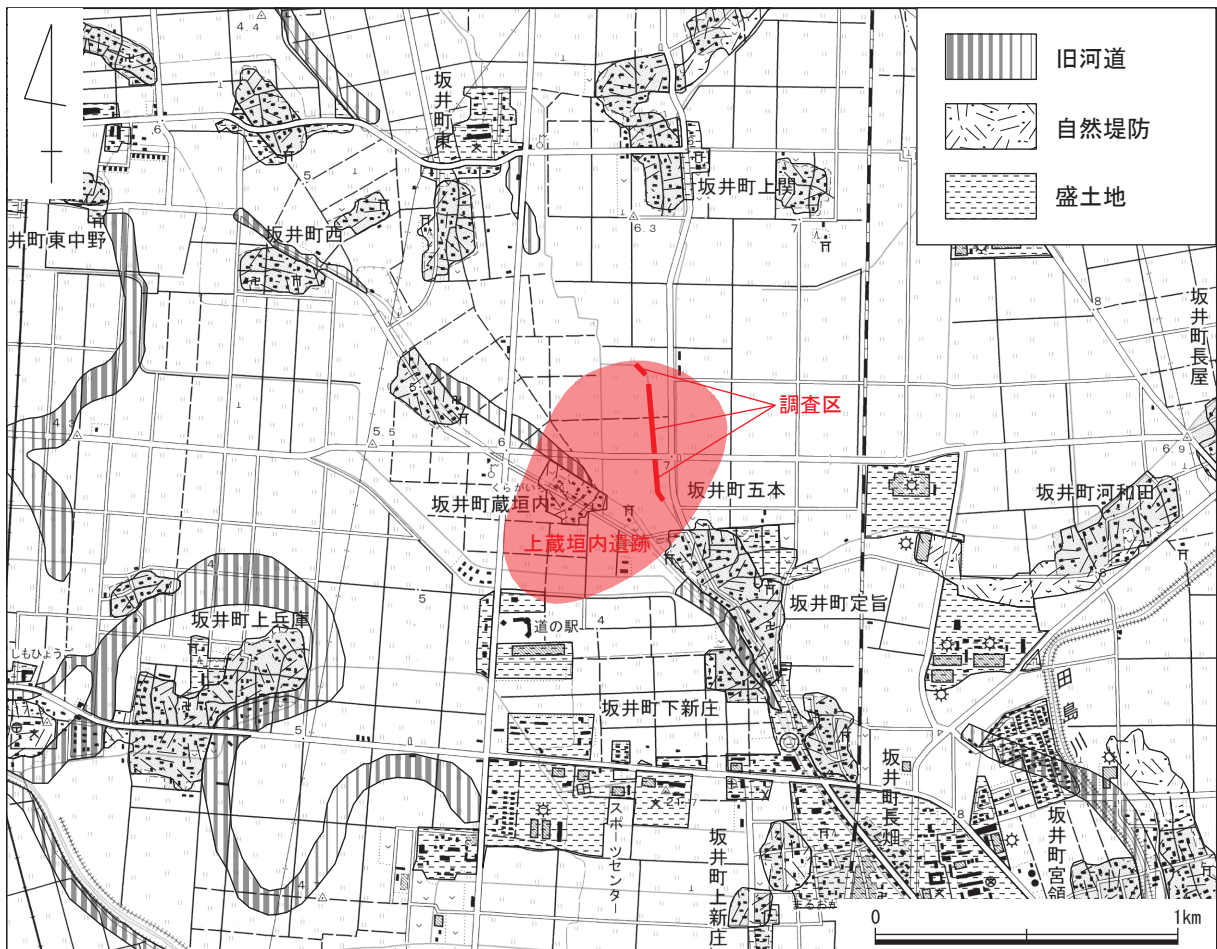
### 第1節 地理的環境（第3図）

福井県は古代の越前・若狭両国から構成され、本州日本海沿岸のほぼ中央近く、本州が西から次第に北東へ折れ曲がる付近に位置する。現在では敦賀市の東方、木ノ芽山嶺を境に以北を嶺北、以南を嶺南と呼び、行政的にも大別される。嶺北地方は越前国から現在の敦賀市を除いた範囲にほぼ相当し、嶺南地方は古代の若狭国に現在の敦賀市を合わせた範囲に相当する。

福井平野は嶺北地方に展開する福井県最大の平野であるが、県下では一般に福井市南部の文殊山以南を武生盆地、福井市北部を西流する九頭竜川以北を坂井平野、両者の中間部を福井平野と各々細別しており、上蔵垣内遺跡の所在する坂井市は市域の大半が坂井平野に属する。

坂井平野は九頭竜川やその支流の竹田川・兵庫川などによって形成された、低平・低湿な沖積平野である。かつては氾濫土砂の堆積や流入による自然堤防地形や、「クロ」と呼ばれる島状の微高地が多数存在したとされるが、近年の大規模開発事業でその多くは削平され、往時の地景は失われて久しい。

上蔵垣内遺跡は竹田川の支流である田島川と兵庫川に挟まれた平野部の中央に位置し、遺跡範囲およびその周辺には蔵垣内・五本・上関の各集落が立地する自然堤防や盛土地のほか、旧河道の埋立地なども認められる。旧河道跡から推測して、田島川・兵庫川の旧支流が現在の五本集落方面から遺跡範囲を南東-北西方向へ放射状に貫流していたものと推測される（第3図）。



## 第2節 歴史的環境（第4図）

本節では上蔵垣内遺跡およびその周辺域の主要な遺跡のうち、特に近年の主要調査成果を記す。

**上蔵垣内遺跡**（第4図1）かみくらがいちいせき 坂井市坂井町蔵垣内・五本・上関くらがいち ごほん かみぜきに所在する。平成21・22・25年（2009・2010・2013）に県埋文が発掘調査を実施した。平成21・22年の調査では弥生時代・古代の溝や中・近世の井戸を多数検出しており、特に古代の溝は十郷用水に関連するものと考えられる。

**金津新江ノ尻遺跡・下関遺跡**（第4図6・22）かなづしんえのしりいせき しもぜきいせき 金津新江ノ尻遺跡はあわらし新用しんように、下関遺跡は坂井市坂井町下関に所在する<sup>(1)</sup>。平成24年（2012）に県埋文が発掘調査を実施し、主な遺構として溝6条、井戸1基、土坑10基、ピット約50基を検出した。出土遺物は弥生時代中期の土器が大半で、石器や玉作り関連遺物も少量含む。弥生時代中期の集落跡と推測される。

**南稻越遺跡**（第4図9）みなみのいながえいせき あわらし稲越いなごえ・伊井いに所在する。平成5年（1993）に旧金津町教育委員会（以下、旧金津町教委）が、同16・17年（2004・2005）にあわらし教育委員会が、同27・28年（2015・2016）に県埋文が発掘調査を実施した。主要な成果として、平成16・17年の調査では弥生時代終末期から古代にかけての遺構・遺物を検出した。

**伊井遺跡**（第4図10）い あわらし市伊井いに所在する。平成2・4年（1990・1992）に旧金津町教委が発掘調査を実施した。弥生時代後期から古墳時代中期を中心とした複合遺跡で、玉作り工房と見られる平地住居や多数の玉作り関連遺物を検出した。

**大味上遺跡**（第4図13）おおみかみいせき 坂井市坂井町大味おおみに所在する。平成8・9・22年（1996・1997・2010）に県埋文が発掘調査を実施した<sup>(2)</sup>。平成8年の調査では主に縄文時代～中世の遺構・遺物を検出した。

**大味中遺跡**（第4図14）おおみなかいせき 坂井市坂井町大味おおみに所在する。昭和6年（1931）の耕地整理の際に独鈷石と弥生式土器3点が出土したと伝えられる。平成8・22年（1996・2010）に県埋文が、同9年（1997）に旧坂井町教育委員会（以下、旧坂井町教委）が発掘調査を実施した<sup>(3)</sup>。平成8年の調査では主に中世（13～16世紀）の遺構・遺物を検出した。

**下兵庫北遺跡**（第4図16）しもひょうごきたいせき 坂井市坂井町下兵庫しもひょうごに所在する。平成8～12年（1996～2000）に県埋文が発掘調査を実施し、縄文時代中期、弥生時代後期後半～終末、古代の遺構・遺物を検出した<sup>(4)</sup>。

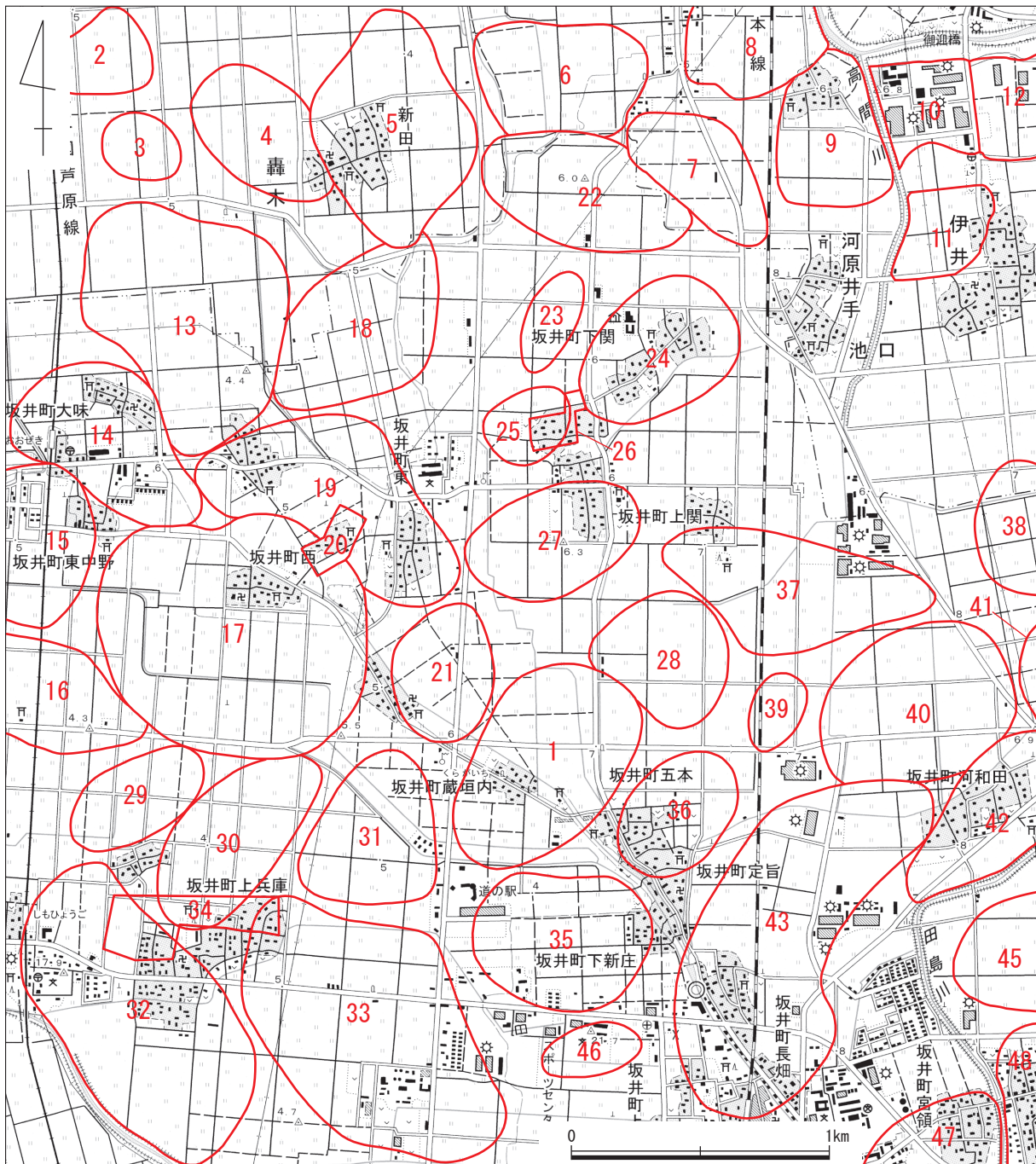
**大関西遺跡**（第4図17）おおせきにし 坂井市坂井町西にしに所在する。平成10年（1998）に県埋文が、同10～12年（1998～2000）には旧坂井町教委が発掘調査を実施した<sup>(5)</sup>。旧坂井町教委の調査では、縄文時代後期の配石遺構や建物跡と見られる環状柱列を検出したほか、素掘り井戸より多量の弥生時代終末期の土器や木製衣笠などが出土している。

**大関東遺跡**（第4図19）おおせきひがし 坂井市坂井町東・蔵垣内ひがしに所在する。平成8・20・21年（1996・2008・2009）に県埋文が、同10年に旧坂井町教委が発掘調査を実施した<sup>(6)</sup>。平成20・21年の調査では、平安時代の遺構・遺物を多く検出している。

**関中遺跡**（第4図24）せきなかいせき 坂井市坂井町下関に所在する。平成24年に県埋文が発掘調査を実施した。溝11条、井戸10基、土坑5基、ピット約70基を検出し、土師質皿や越前焼・青磁・瀬戸美濃焼、漆器椀・皿などの中世遺物が主に出土した。15世紀後半から16世紀前半を中心とした中世集落で、時期不詳だが本遺跡南西に隣接する下関館跡しもせきやかたあと（第4図26）にも関連する集落と推測される。

**長屋遺跡**（第4図41）ながやいせき 坂井市坂井町長屋ながやに所在する。遺跡の発見は古く、大正6年（1917）には学会に報告されている。昭和60～62年（1985～1987）に県埋文が発掘調査を実施し、弥生時代終末期の方形周溝墓2基や土壇墓をはじめ、6～7世紀代の竪穴住居8棟などを検出した。





No.	県番号	遺跡名	No.	県番号	遺跡名	No.	県番号	遺跡名	No.	県番号	遺跡名
1	11040	上蔵垣内遺跡	13	11023	大味上遺跡	25	11036	館遺跡	37	11049	島田遺跡
2	09117	中番江ノ口遺跡	14	11024	大味中遺跡	26	11037	下関館跡	38	11050	長屋平田遺跡
3	09118	中番中元遺跡	15	11026	東中野遺跡	27	11038	上関遺跡	39	11051	五本為信遺跡
4	09124	轟木遺跡	16	11027	下兵庫北遺跡	28	11039	上関高田遺跡	40	11052	河和田北遺跡
5	09125	新田遺跡	17	11028	大関西遺跡	29	11041	染田遺跡	41	11053	長屋遺跡
6	10073	金津新江ノ尻遺跡	18	11029	東寺田遺跡	30	11042	上兵庫錆田遺跡	42	11054	河和田遺跡
7	10074	河原井手遺跡	19	11030	大関東遺跡	31	11043	上兵庫巻地遺跡	43	11055	長畑・定旨遺跡
8	10076	稲越遺跡	20	11031	大口城館	32	11044	上兵庫西遺跡	44	11056	御油田遺跡
9	10077	南稲越遺跡	21	11032	下蔵垣内遺跡	33	11045	上兵庫東遺跡	45	11059	河和田向田遺跡
10	10085	伊井遺跡	22	11033	下関遺跡	34	11046	上兵庫館跡	46	11060	上新庄五十石遺跡
11	10086	伊井植木遺跡	23	11034	下関蔵町遺跡	35	11047	下新庄遺跡	47	11067	宮領遺跡
12	10087	清間遺跡	24	11035	関中遺跡	36	11048	五本遺跡	48	11069	田島遺跡

第4図 上蔵垣内遺跡と周辺の遺跡分布図（縮尺1/25,000）



**河和田遺跡**（第4図42） 坂井市坂井町河和田に所在する。明治時代末期の土地改良時に発見され、当時の学会でも注目を浴びた。その後、昭和39年（1964）に國學院大學が学術調査を実施し、古墳時代初頭の玉作り工房とみられる竪穴住居を検出した。また、昭和57年（1982）には、かねてより本遺跡の学術調査を継続していた明治大学考古学研究室が旧坂井町教委の委託を受けて発掘調査を実施し、弥生時代後期後半の遺構や玉作り関連遺物を検出した。

**宮領遺跡**（第4図47） 坂井市坂井町宮領に所在する。昭和27年（1952）ごろの田島川排水復旧工事の際、右岸地域の畑地から須恵器の坏や坏蓋が約10個出土したと伝えられる。昭和41年（1966）、畑の土取作業中に遺物が出土したため、旧坂井町教委が発掘調査を実施した。古墳時代の炉跡を検出したほか、土師器や須恵器、鉄鏃などの遺物も出土した。

#### 註

- 隣接する2つの遺跡名を併記するのは、平成24年度調査区が両遺跡の範囲に跨り、遺跡の内容から一連の集落と判断するためである（田中2016）。
- 平成8年の調査は大味地区遺跡群（本多編1999）の本調査区と、立会2-1～9区、同3-1～4区、同5区が相当する。
- 平成8年の調査は、大味地区遺跡群の立会3-7・8区、同4区が相当する。
- 坂井兵庫遺跡群（中川編2004・2005）の下兵庫A～C・F～J・L地区が相当する。
- 旧坂井町教委の調査は、坂井大関西鯉地区遺跡群（齊藤編2005）の4～10区が相当する。
- 平成8年の調査は大味地区遺跡群の立会1区が、平成10年の調査は坂井大関西鯉地区遺跡群の1～3区が相当する。

#### 参考文献

- 青木隆佳 編『大関東遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第133集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2012年  
 青木隆佳 編『大関東遺跡・上蔵垣内遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第139集 同 2013年  
 青木隆佳 編『大味上遺跡・大味中遺跡・下番荒谷遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第157集 同 2015年  
 青木隆佳・仁科章「第二章 黎明期の坂井町」『新修 坂井町誌 通史編』坂井市 2007年  
 市瀬由自「第2章 福井平野の地形と洪水」『水害地域に関する調査第7部 九頭竜川流域の水害地形と土地利用』科学技術庁資源調査所資料第3号 科学技術庁資源調査所 1968年  
 上田三平『越前及若狭地方の史蹟』歴史図書社 1974年（1933年の復刻）  
 小葉田淳 監修『福井県の地名』日本歴史地名体系 第18巻 平凡社 1981年  
 河原純之・島田正彦・隼田嘉彦・松浦義則 責任編集『角川日本地名大辞典 18 福井県』角川書店 1989年  
 株式会社イビソク 編『南稻越遺跡』あわら市埋蔵文化財報告第1集 あわら市教育委員会 2007年  
 齊藤裕二「大味中遺跡」『第13回発掘調査報告会資料』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1998年  
 齊藤裕二 編『坂井大関西鯉地区遺跡群』坂井町埋蔵文化財調査報告 坂井町教育委員会 2005年  
 齋藤與次兵衛『福井県坂井郡坂井町宮領東部遺跡調査報告』同 1966年  
 佐藤俊朗「第6章 九頭竜川下流坂井平野の自然条件と用排水機構」『水害地域に関する調査第7部 九頭竜川流域の水害地形と土地利用』科学技術庁資源調査所資料第3号 科学技術庁資源調査所 1968年  
 鈴木篤英「南稻越遺跡」『第31回 福井県発掘調査報告会資料』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2016年  
 田中勝之『関中遺跡 下関遺跡 金津新江ノ尻遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第161集 同 2016年  
 寺村光晴「第三章 二 越前国河和田遺跡」『古代玉作の研究』吉川弘文館 1966年  
 中川佳三 編『大関東遺跡・大味上遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第44集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1999年  
 中川佳三 編『坂井兵庫遺跡群』福井県埋蔵文化財調査報告第73・81・82集 同 2004・2005年  
 中森敏晴「上蔵垣内遺跡」『年報29』同 2015年  
 仁科章『長屋遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第13集 同 1987年  
 仁科章「第八章 坂井町の考古資料」『新修 坂井町誌 通史編』坂井市 2007年  
 野路昌嗣 編『上蔵垣内遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第151集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2014年  
 橋本幸久「第1章 8 南稻越遺跡」『金津町埋蔵文化財調査概要 平成元年～五年度』金津町教育委員会 1995年  
 橋本幸久・鈴木篤英「第1章 2 伊井遺跡」『金津町埋蔵文化財調査概要 平成元年～五年度』同 1995年  
 廣嶋一良「52 長屋遺跡」・「53 河和田遺跡」『福井県史 資料編13 考古』福井県 1986年  
 福井県教育委員会『福井県遺跡地図』1993年  
 本多達哉 編『大味地区遺跡群』福井県埋蔵文化財調査報告第43集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1999年  
 明治大学考古学研究室 編『福井県坂井郡坂井町 河和田遺跡発掘調査概報』坂井町教育委員会 1983年  
 山本孝一 編『大関西遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第53集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2001年

## 第3章 遺構と遺物

### 第1節 遺跡の概要（第5図）

#### 1 地形と層序

上蔵垣内遺跡は田島川および兵庫川流域の低平・低湿な沖積平野上に展開し、縄文・弥生・古代・中世・近世の各時代遺跡として周知される。今回の調査区は蔵垣内集落の東方および五本集落の北方、上関集落の南方に広がる水田地帯に位置し、遺跡範囲の北半部を南北に縦断する形となる。

今回の調査区では水田耕作土・盛土や人工構造物の直下で地山層（基盤層）が露出し、近年の大規模開発の影響ですべての遺物包含層が削平されたものと推測する。標準層序は以下のとおりである。

**I層**：表土層。水田耕作土や道路部の盛土など、主に開発に伴う造成土で構成される。

**II層**：地山層。黄褐色粘質土で構成される。

遺構検出面の標高は1区が5.10～5.30m、2区が5.00～5.30m、3区が4.70～4.90mをそれぞれ測り、ほぼ平坦と言える。これは主に開発による削平の影響が大きく、遺跡およびその周辺地の平野部では、かつて発達した自然堤防や後背湿地などの自然地形はその痕跡すらほとんど見出せない。

#### 2 遺構検出状況

1・2区では近世以降の攪乱や開発による削平の影響が大きいものの、おおむね良好な遺存状態を保っていたが、3区では削平が地山層以下まで深く及んでおり、遺構・遺物とも全く検出し得なかった。以下、3区に関しては本項の記述を報告のすべてとし、1・2区の調査成果のみ記述する。

検出遺構は自然河川、溝、土坑、ピットで、土坑・ピットは遺物を得たもののみ遺構番号を付した（第5図）。その内訳は1区が自然河川1条と溝1条、2区が自然河川2条、溝22条、土坑10基、ピット3基をそれぞれ数える。1・2区とも自然河川や溝が主体を占めるが、2区中央を東西に横断する自然河川（SR2）を境として遺構の様相が大きく異なり、特にSR2以北に遺構の大半が集中する。

#### 3 遺物出土状況

出土遺物量は大型コンテナで3箱を数える。内訳は1区が2箱、2区が1箱で、全体に遺物量が非常に少なく、特に2区は調査面積に比して極端に少ない。内容は縄文土器、弥生土器、土師器・須恵器、土師質皿、中・近世陶磁器類のほか、わずかながら石器や金属製品も得た。土器類はすべて破片で、接合資料も数点程度にとどまる。磨滅の顕著なものも多く、いわゆる流れ込みである可能性が高い。

### 第2節 遺構（図版第1・2、第6～10図、第1～4表）

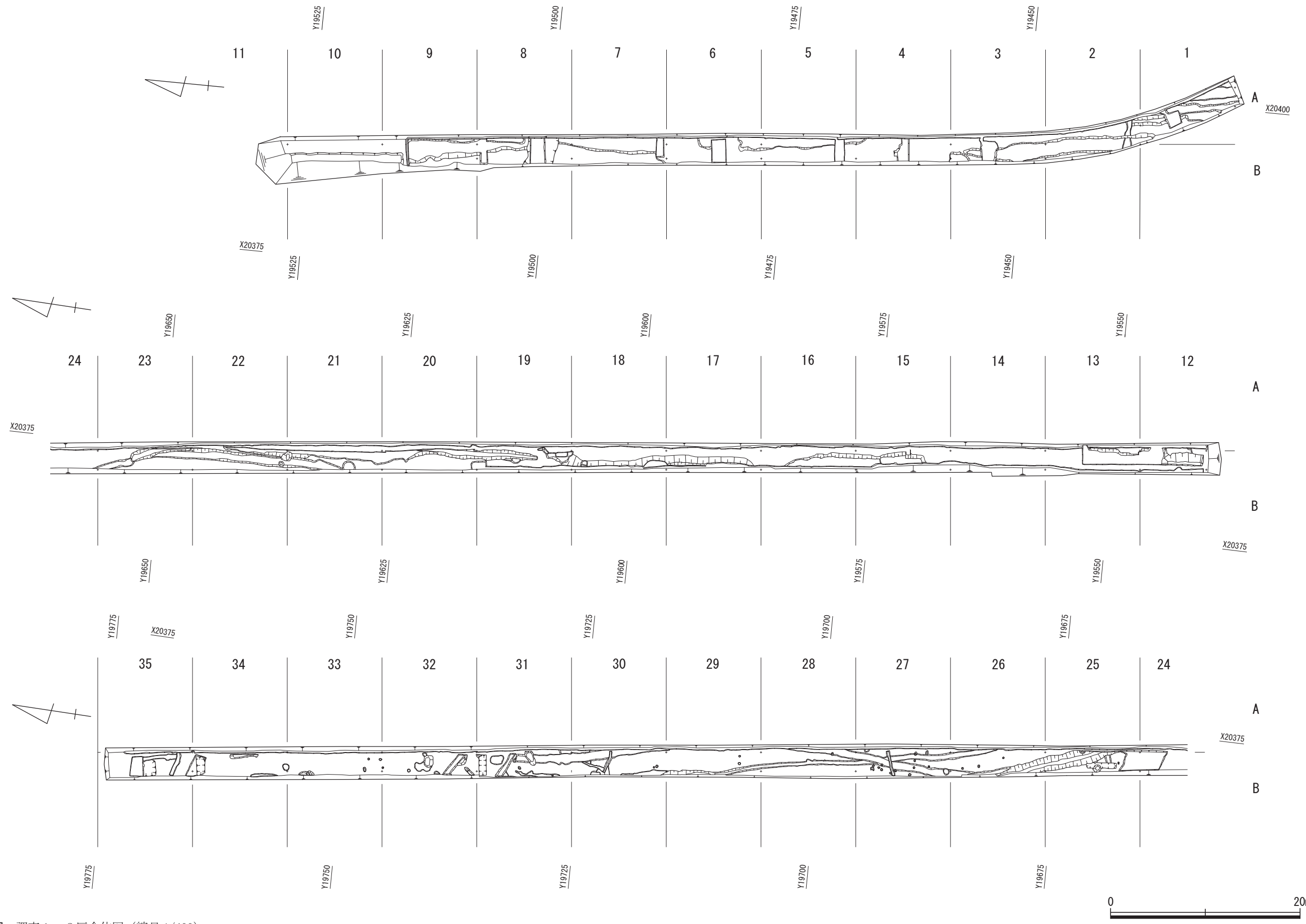
本節では主要遺構について概略を記述する。個別の詳細は各遺構一覧表（第1～4表）を、出土遺物は本章第3節をそれぞれ参照されたい。なお、本節で提示する各遺構の規模（長さ・幅・深さ）や方位（角度）などの数値は、すべて遺構検出面を基準として測量図上で算定した概数値である。

#### 1 1区

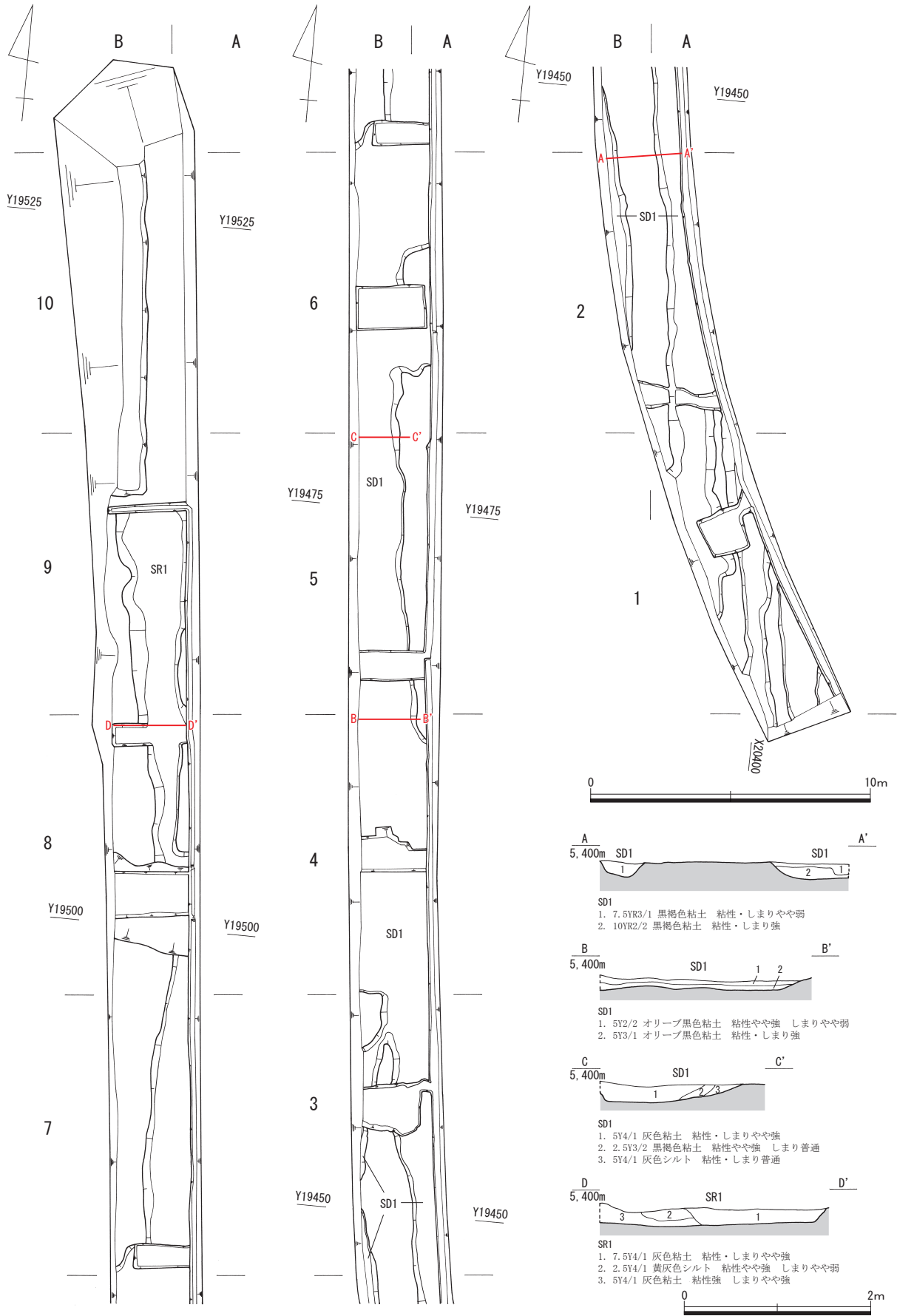
##### 1) 自然河川・溝（第6図、第1表）

各1条を検出した。SR1は調査区北端より南方へ延伸する自然河川で、南端部で西岸肩部を検出したが、東岸は確認できず、調査区外に拡張するものと推測する。SD1はSR1のさらに南方から調査区南端まで連続する溝で、南端付近で3条に分流する。



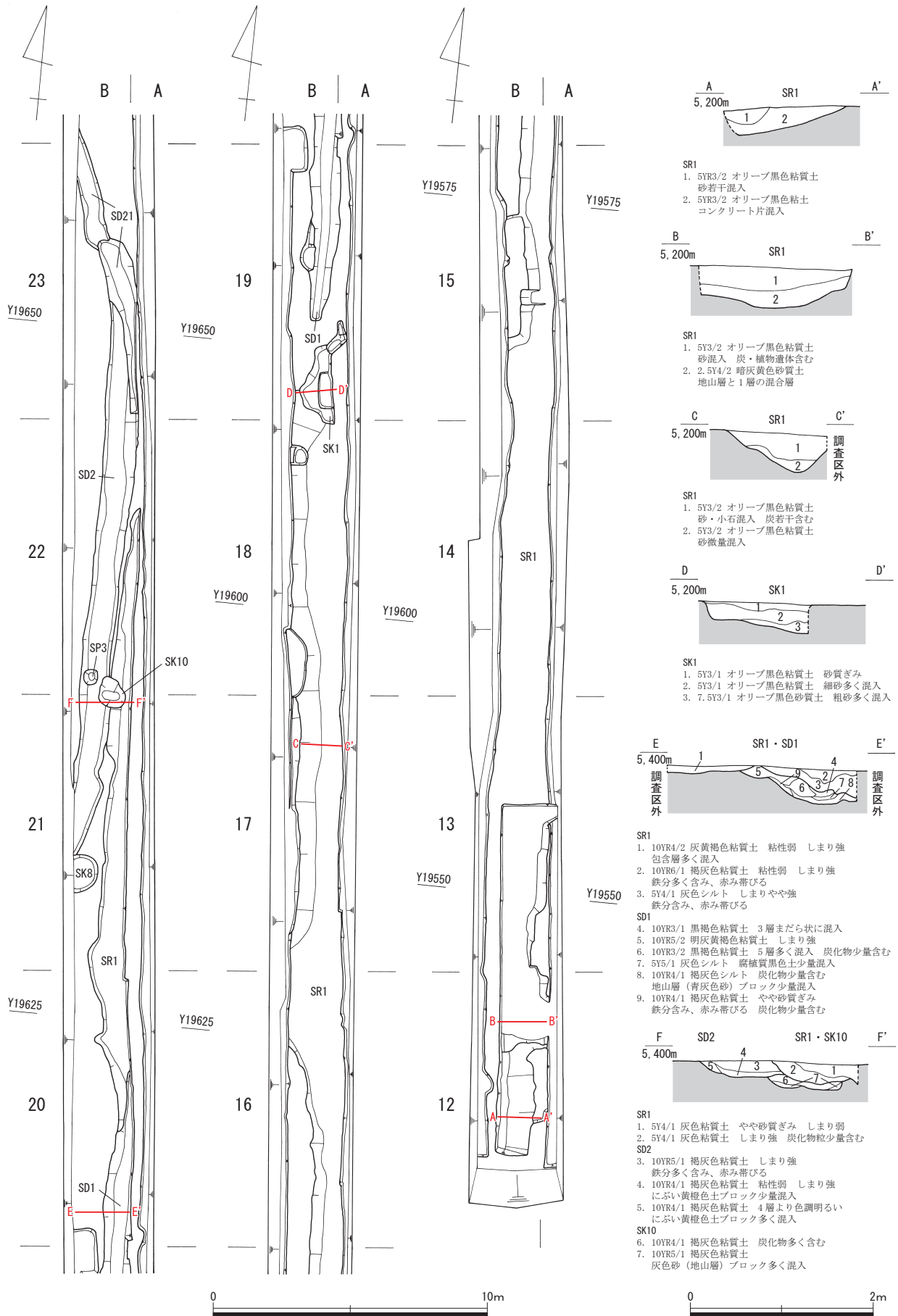


第5図 調査1・2区全体図 (縮尺 1/400)

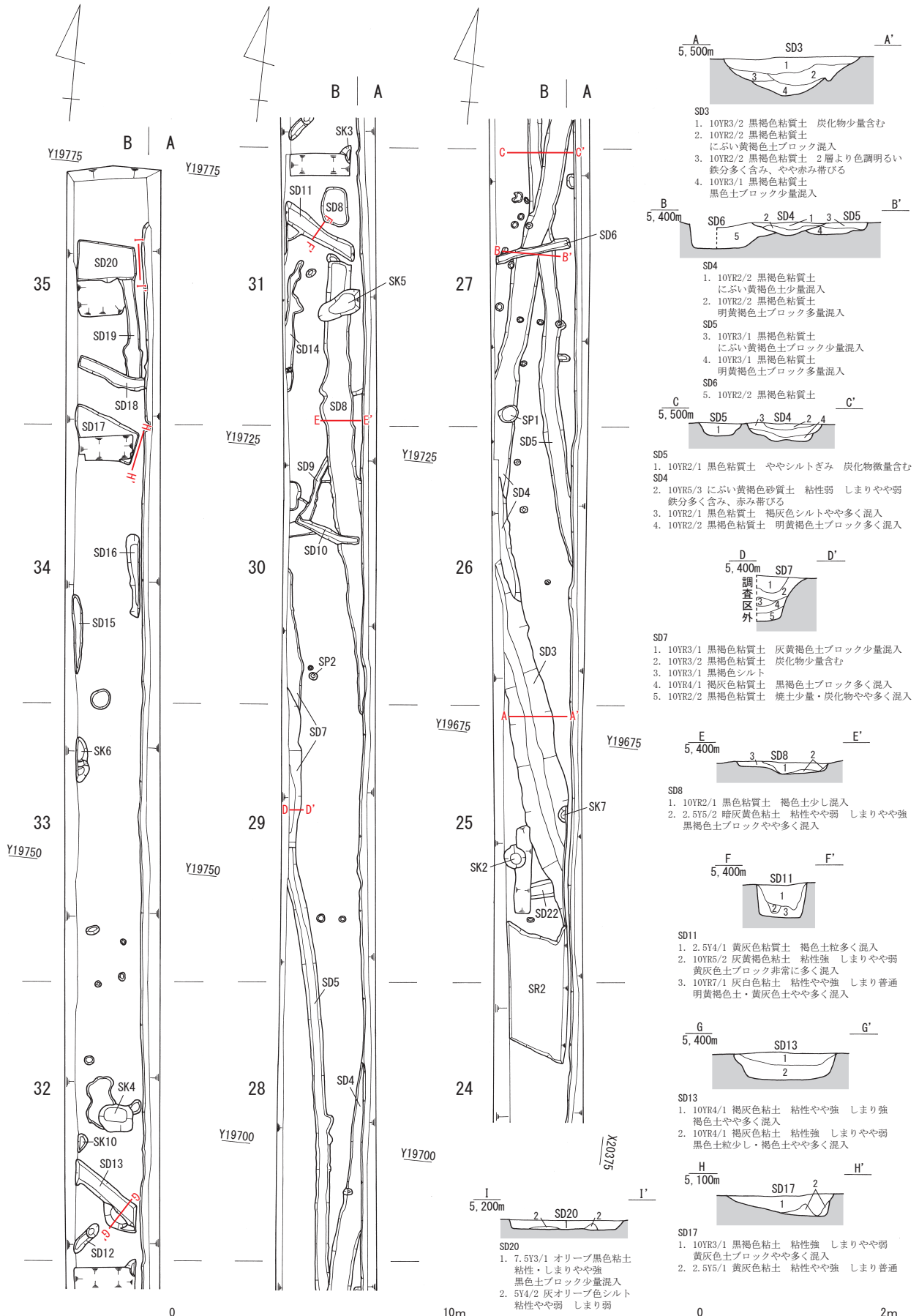


第6図 1区 遺構実測図 (縮尺 遺構 : 1/200、断面 : 1/60)

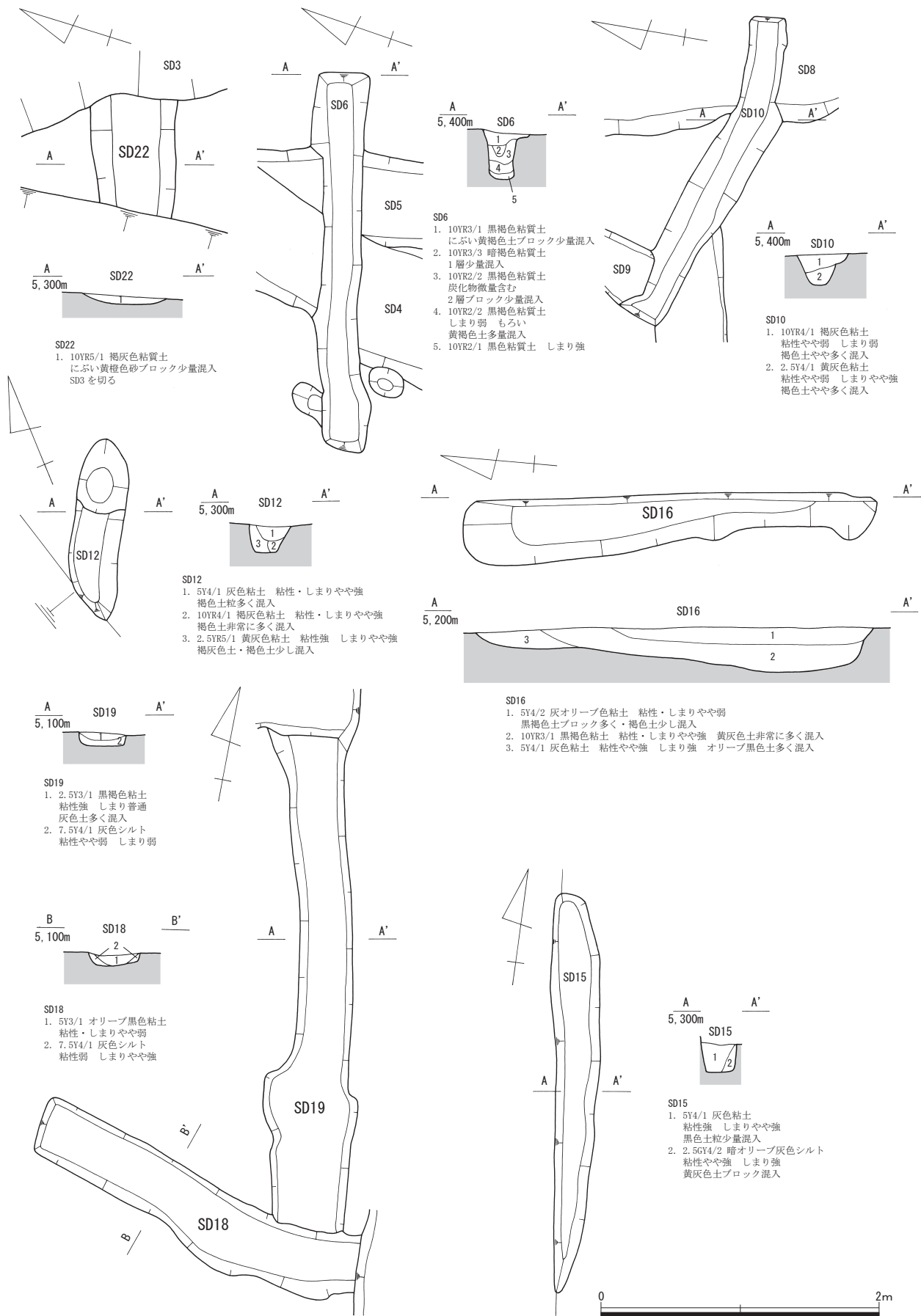




第7図 2区 12~23グリッド遺構実測図 (縮尺 遺構: 1/200, 断面: 1/60)



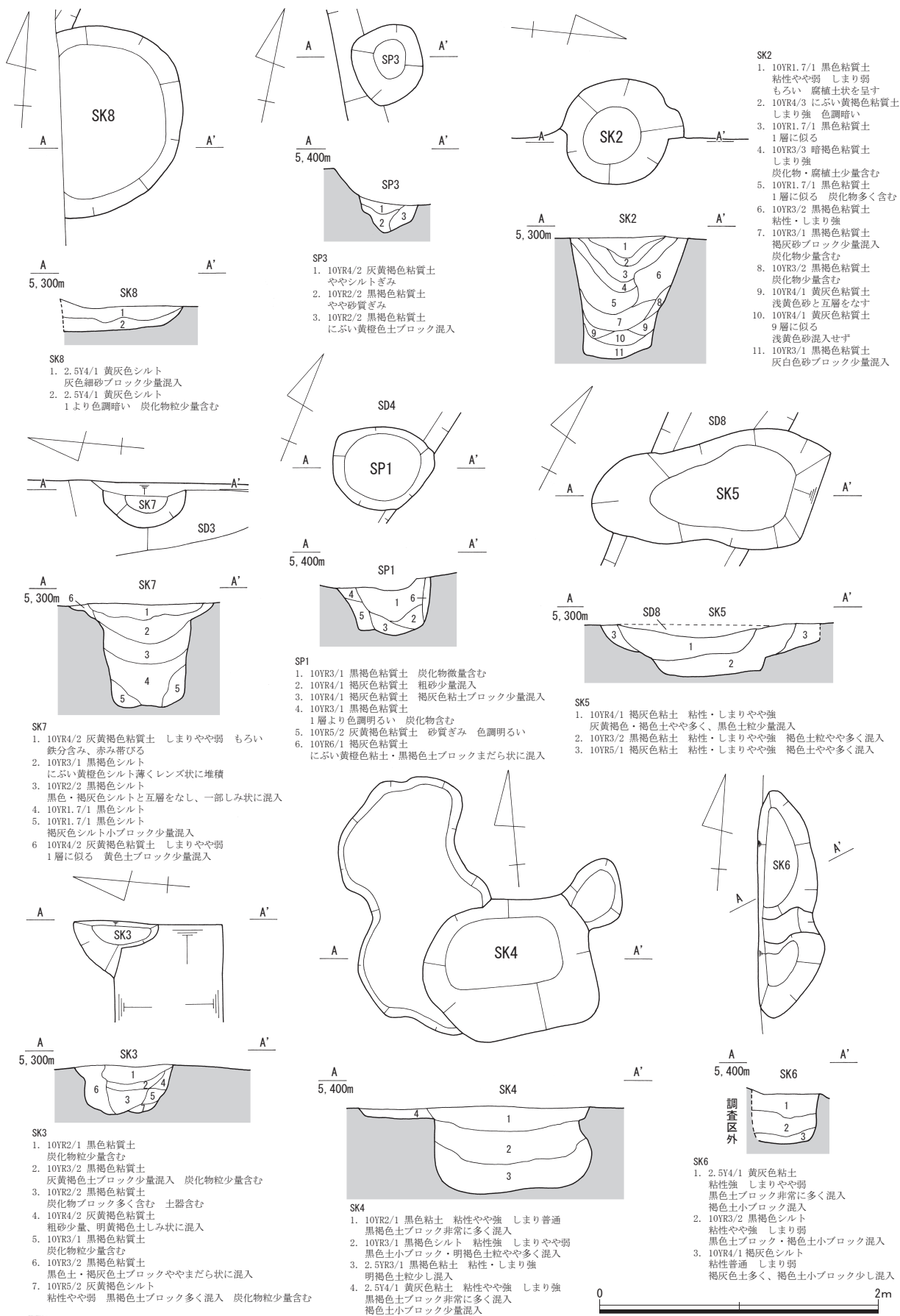
第8図 2区 24~35グリッド遺構実測図 (縮尺 遺構: 1/200、断面: 1/60)



第9図 2区 SD6・10・12・15・16・18・19・22実測図 (縮尺1/40)



第2節 遺構



第10図 2区 SK2～8、SP1・3実測図(縮尺1/40)

### 第3節 遺物（図版第3・4、第11～14図、第5・6表）

#### 1 縄文土器

破片を主体とする。出土量は弥生土器より多い。所属時期は晩期後葉に限定される。以下、沈線や刺突などによる文様の有無により、有文土器と無文土器に大別して説明する。

##### 1) 有文土器（第11図1・7・11）

1は浅鉢である。口縁部が「フ」字状に内屈し、幅広となる口縁端部に沈線を施す。口縁側端部に眼鏡状隆帯文を配し、その直下に4条の浅い平行沈線文を配す。沈線施文後にナデを施す。7は浅鉢の体部上半である。4条の平行沈線文を確認できる。ナデ後に沈線を施文する。11は深鉢または壺の胴部上半である。上下2連の押し引き状の刺突文を3帯配す。各刺突文帯は間隔を広くもつ。刺突文は断面が「Σ」字状となり、各刺突文帯においても上側の刺突文が深くなる。丁寧な縦位ナデ後に刺突文を施文する。内面にはナデを施すが、上方を中心に絞り痕が残る。

##### 2) 無文土器（第11図2・4・8～10・12～17・20・21）

器種には深鉢（10・12～17）、壺（2・8）、浅鉢（9）があり、破片としての底部（4・20・21）がある。15は壺の可能性もある。外面調整には縦位条痕（2・4・10・13・15～17・20・21）、ケズリ状の強い横位ナデ（12）、縦位ナデ（14）がある。口縁部の最終調整として横位ナデを施し、無文部とする例（2・10・12・13）がある。底部（4・20・21）はいずれも胴部から底側部まで縦位条痕を施文後、底側部に指による横位ナデを施す。

2は口縁部が直立し、肩部が大きく張り出す器形を呈す。口縁端部には指による浅い押圧を施す。内面には粗いナデを施す。4は底面に粗いナデを施すが、単位性のない敷物痕である径2～5mmの小孔が多数残る。内面には板状工具によるナデを施す。8は口縁部が直立する。肥厚して短く外屈する突帯状の口唇部には指による押圧を施す。口唇部下方にはナデを施し、無文部となる。9は口唇部が肥厚して短く外屈する。幅広の口縁端部には強いナデを施し、中央部が凹線状となる。内外面ともに丁寧なナデを施す。10は口縁端部に指による刻みを施す。12は口縁端部にナデによる面をもつ。胴部の横位ナデは幅2cm以上の板状工具による。口縁部の横位ナデは縦位条痕例（2・10・13）と共通する。13は口縁部が内傾し、口唇部が折り返し状に短く肥厚する。口縁端部には面をもたない。14は縦位ナデを口唇部まで施す。20・21は底面に丁寧なナデを施す。4と同様な敷物痕である小孔はほぼ残らない。

これらの縄文土器の編年的位置は、おおむね12が大洞C2式後半～同A式前半に、その他が大洞A式に併行すると考える。有文土器のうち、1・2は工字文系土器であり、11は長竹式の範疇に収まる土器である。無文土器のうち、2・4・8・10・13～17・20・21は在地系の糞置式に比定される。12は口縁端部や胴部の調整などから、糞置式より古い様相を示す。

#### 2 弥生土器

摩滅が顕著な個体が多い。時期は中期と後期が認められる。以下、時期ごとに説明する。

##### 1) 中期の土器（第11図3・5・18・19）

3は櫛描文系の広口壺である。口縁部が強く外湾し、上方を向く口縁内面には直線文原体刺突による羽状文を施し、口縁端面にはヘラ描斜格子文を施す。頸部にはヘラ描斜行刻目文と櫛描直線文を2帯配す。直線文は6、7条である。頸部上方には太く浅い縦位ハケを施す。内面には粗いナデを施す。5は甕である。口縁部が「く」字状に外反する。口縁端部にはナデを施すが、明瞭な面をもたない。外面には縦位ハケを施すが、口頸部では顕著ではなく、ハケ後に横位ナデを施し、指頭圧痕も残る。内面は口



第11図 縄文土器・弥生土器実測図（1～6：縮尺1/4、その他：縮尺1/3）

縁部には短く連続する横位ハケ、胴部上半には斜位ハケ、胴部下半には縦位ハケを施す。胴部下半にはハケ後に間隔をあけて縦位ナデを施す。18は櫛描文系の壺頸部である。5条の直線文2帯とヘラ状工具による挟り状の三角形文を1帯配す。直線文2帯は密接する。直線文は浅く、条線間の断面は丸みをもつ。外面には丁寧な斜位ナデ、内面には太く浅いハケ後丁寧なナデを施す。19は条痕文系の壺胴部上半である。櫛状工具による縦位短沈線文の直下に幅広のヘラ描弧線文を施す。外面には斜位条痕を施す。施文順序は条痕後に縦位短沈線と弧線文となる。内面にはナデを施す。

## 2) 後期の土器 (第11図6)

6は甕である。端部がすぼまり、やや外傾する有段口縁部に擬凹線を施す。月影式に相当する。胴部の外面にはハケ、内面にはケズリを施す。

第5表 縄文土器・弥生土器出土地点一覧表

挿図No.	出土地点		挿図No.	出土地点		挿図No.	出土地点		挿図No.	出土地点	
第11図1	A7・8	SD 1	第11図7	A7	SD 1	第11図13	B23	SD 2	第11図19	A31	遺構面精査
第11図2	A7	SD 1	第11図8	A22	SR 1	第11図14	A22	SR 1	第11図20	A7	SD 1
第11図3	A32	SK10	第11図9	A7	SD 1	第11図15	B22	SD 2	第11図21	A7	SD 1
第11図4	B23	SD 2	第11図10	B23	SD 2	第11図16	A22	SR 1			
第11図5	A33	SK 6	第11図11	B29	SD 7	第11図17	A3	SD 1 (トレンチ)			
第11図6	A7	SD 1	第11図12	B23	SD 2	第11図18	A7	SD 7			

## 3 古代～近世の土器

古代の土器には土師器と須恵器が、中・近世の土器には土師質皿や陶磁器類がある。いずれも磨滅が顕著なものが多く、破片も数点接合した程度である。所属時期については、土師器と須恵器が主に8世紀後半から9世紀代で、9世紀後半から10世紀にかかる時期まで下るもの(第12図13)もある。陶器類は13～16世紀代、土師質皿と磁器は18世紀代まで下るものとする。

### 1) 須恵器 (第12図1～16)

1～4は口径が13～14cm前後の無台坏(坏A)、6～8は有台坏(坏B)である。9・10は有台坏で、口径は不明ながら6～8より明らかに大きくなるものとする。5はかえりの無い蓋である。11～13は口径が15～16cm前後の皿で、口縁への立ち上がりが大きく開く。14は口縁が小さく屈曲する鉢、15はおそらく瓶類の底部である。16はその径から短頸壺の胴部下半と推測する。

### 2) 土師器 (第12図17～21)

17・18は長胴甕の口縁部である。17は小さく開いた口縁部の端部を強いナデによって受口状にする、本遺跡周辺の古代遺跡からも多く出土する典型的なロクロ成形品である。18は厚手の口縁部の端部が内面に肥厚するもので、形状や調整から非ロクロ成形品と推測する。19は小型甕の平底である。20は甕の把手部分である。21は胴部片であるが、色調などから17と同一個体の可能性が高い。

### 3) 土師質皿 (第13図1・2)

1はナデ成形で口縁に煤の付着が残る。2は底部に糸切の痕跡が残る、非常に丁寧な作りで焼成も良好である。

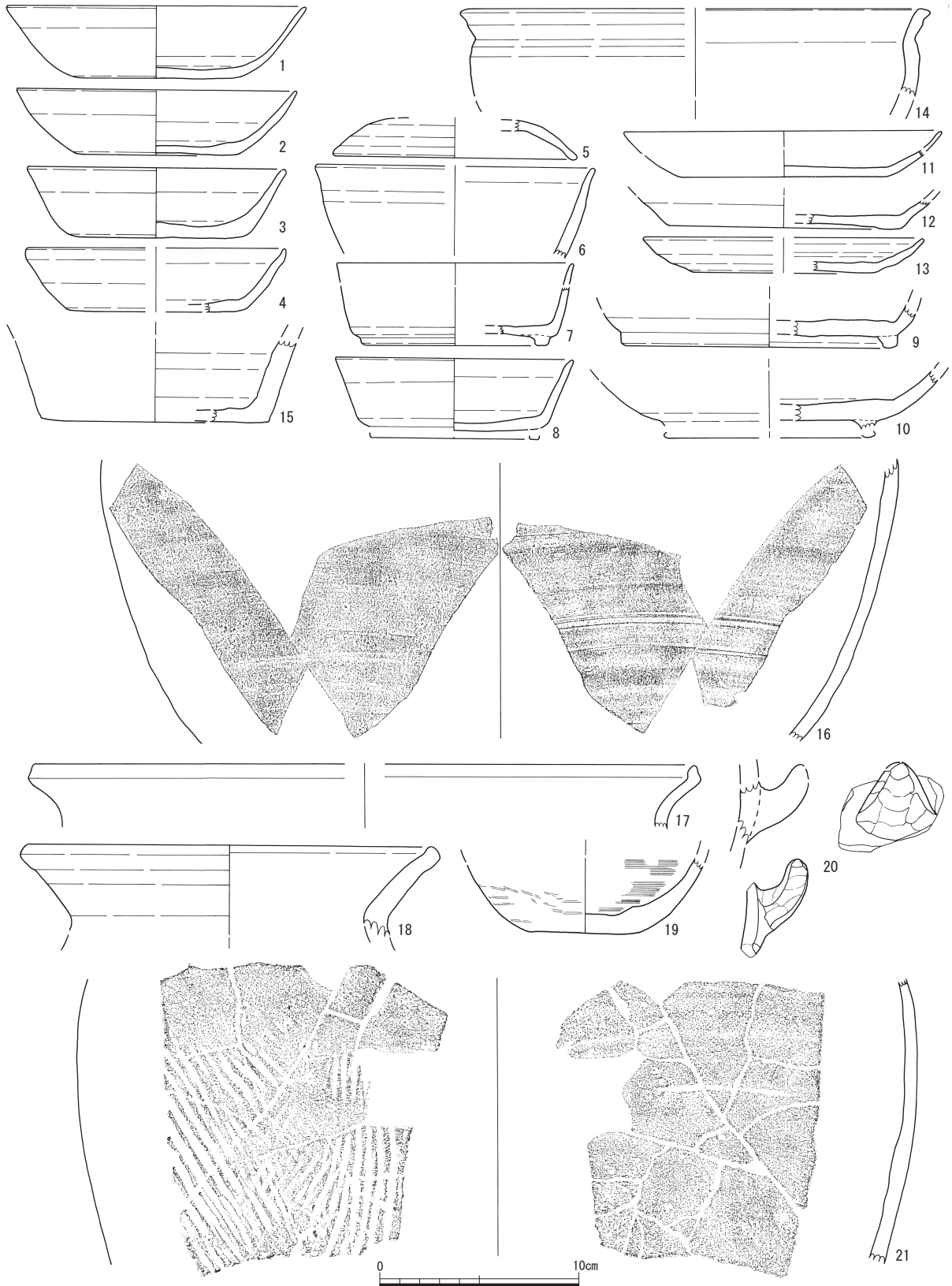
### 4) 陶器 (第13図3～5・7～9)

3～5は越前焼で、3は摺鉢の口縁部、4は甕の口縁部、5は捏鉢の底部である。7は天目茶碗の口縁部、8は輪花口縁の皿である。所属時期は4・5が13・14世紀代、3・7・8が15・16世紀代とそれぞれ考える。9は土製円盤で、胎土の特徴から中世越前焼の甕胴部片を利用したものとする。

### 5) 磁器 (第13図6)

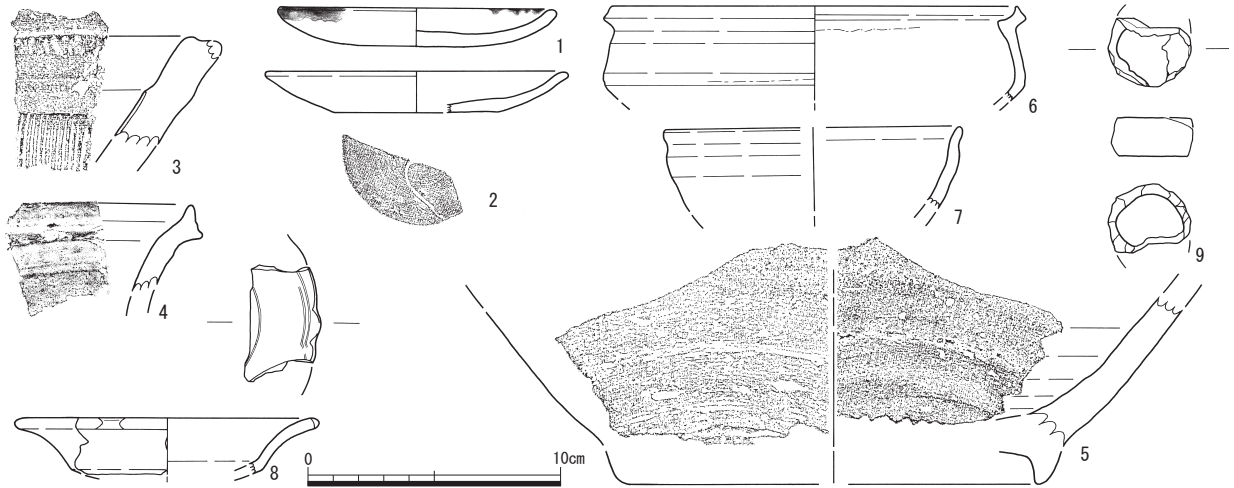
6は口縁が小さく立ち上がる磁器の鉢で、胴部の最大径まで釉薬がかかる。





第12図 土師器・須恵器実測図（縮尺1/3）

第3章 遺構と遺物



第13図 土師質皿・陶器・磁器実測図(縮尺1/3)

第6表 土師器・須恵器・土師質皿・陶器・磁器一覧表

※法量の単位はcm、推定値・残量は( )で示す。

挿入番号	種類	遺構名	器種	部位	口径	器高	底径	残存率	調整(内・外)	色調	焼成	胎土	備考
第12図1	須恵器	A23 遺構精査	無台坏	口縁・底部	(14.8)	3.6	(8.4)	3/4	外)回転ナデ、回転ヘラ切り後ナデ 内)回転ナデ	外)10Y6/1 灰 内)10Y6/1 灰	良	砂粒・小石少量含む	
第12図2	須恵器	B23 SD2	無台坏	口縁・底部	(13.9)	3.25	(8.3)	1/2	外)回転ナデ、回転ヘラ切り後ナデ 内)回転ナデ	外)2.5G4/1 暗褐色 内)N4 灰	良	砂粒多く、小石少量含む	
第12図3	須恵器	B23 SD2	無台坏	口縁・底部	(12.8)	3.5	8.8	3/4	外)回転ナデ、回転ヘラ切り後ナデ 内)回転ナデ	外)N6 灰 内)N6 灰	良	微砂粒・小石少量含む	
第12図4	須恵器	A2 SD1	無台坏	口縁・底部	(13.0)	3.2	(9.0)	1/3	外)回転ナデ 底:回転ヘラ切り後ナデ 内)回転ナデ	外)7.5V7/1 灰白 内)5V7/1 灰白	良好	1~3mmの小石含む	
第12図5	須恵器	A5 SD1	蓋	口縁部	(12.2)	(1.9)		1/12以下	外)回転ナデ、ナデ 内)回転ナデ	外)7.5Y5/1 灰 内)7.5Y5/1 灰	良好	1mm以下の白・黒色粒子含む	
第12図6	須恵器	B17 SR1	有台坏	口縁部	(14.0)	(3.9)		1/12以下	外)回転ナデ 内)回転ナデ	外)5V6/1 灰 内)5V7/2 灰白	良	1mm以下の白・灰色粒子含む	
第12図7	須恵器	B23 SD2	有台坏	底部		(3.0)	10.3	1/10	外)回転ナデ 内)回転ナデ	外)5.7Y7/1 灰白 内)5.7Y6/1 灰	良	1~2mm程の白・灰色小石含む	
第12図8	須恵器	B23 SD2	有台坏	口縁・底部	(11.8)	3.6	8.5	1/2	外)回転ナデ、回転ヘラ切り 内)回転ナデ	外)2.5Y4/1 黄色 内)N6 灰	良	微砂粒・砂粒・小石少量含む	
第12図9	須恵器	A15 遺構精査	有台坏	底部		(2.2)	(13.8)	1/4以下	外)回転ナデ 底:回転ナデ、ナデ 内)回転ナデ	外)7.5YR4/1 褐色 内)7.5YR5/3 にぶい褐色	やや不良	微細な白色粒子・3mm程の白色小石含む	
第12図10	須恵器	A2 SD1	有台坏	底部		(3.0)		1/12	外)回転ナデ 内)回転ナデ	外)N6/ 灰 内)N6/ 灰	良好	微細な白色粒子・3mm大の小石含む	内、高台内に付着物
第12図11	須恵器	A4 SD1 (トレンチ)	皿	底部		(1.35)	10.3	1/4	外)回転ナデ 底:回転ヘラ切り後ナデ 内)回転ナデ	外)5V7/1 灰白 内)5V7/1 灰白	良	緻密 1mm程の白色粒子含む	
第12図12	須恵器	A23 遺構精査	皿	底部		(1.55)	(11.6)	1/8	外)回転ナデ 底:回転ヘラ切り後ナデ 内)回転ナデ	外)10YR8/4 浅黄橙 内)2.5YR/1 灰白	不良	1mm以下の灰白色粒子・微砂含む	土師質
第12図13	須恵器	B23 遺構精査	皿	口縁・底部	(14.0)	1.75	(9.4)	1/12	外)回転ナデ 底:回転ヘラ切り後ナデ 内)回転ナデ	外)2.5Y7/1 灰白 内)2.5Y6/1 黄灰	良好	微細な灰・白色粒子含む	
第12図14	須恵器	B23 SD2	鉢	口縁部	(23.5)	(4.4)		1/12以下	外)回転ナデ 内)回転ナデ	外)7.5Y3/2 オリーブ黒 内)5V6/1 灰	良好	1mm以下の灰・白・褐色粒子含む	外)自然釉
第12図15	須恵器	A7 SD1 (トレンチ)	瓶	底部		(4.2)	11.3	1/12以下	外)回転ナデ 内)回転ナデ	外)10YR3/1 黒褐 内)10YR7/1 灰白	良好	緻密 1mm程の黒・白色砂粒含む	
第12図16	須恵器	B21 SR1	短頸壺	胴部		(14.1)		胴部1/10	外)タタキ目 内)ナデ	外)7.5YR7/4 にぶい橙 内)7.5YR7/4 にぶい橙	やや不良	微砂粒多く、砂粒少量含む	煤付着
第12図17	土師器	B11 表採	長胴壺	口縁部	(33.0)	(3.1)		口縁1/12	外)ナデ調整 内)ナデ調整	外)7.5YR7/4 にぶい橙 内)7.5YR7/4 にぶい橙	やや不良	微砂粒多く含む	煤付着、同図21と同一個体か
第12図18	土師器	A4 SD1 (トレンチ)	長胴壺	口縁部	(21.0)	(4.3)		1/12以下	外)横ナデ 内)磨減	外)10YR8/3 浅黄橙 内)10YR8/3 浅黄橙	やや良	1mm以下の白・灰砂粒、6mm大の小石含む	
第12図19	土師器	B23 SD2	小型壺	底部		(3.8)	5.5	3/4	外)タタキ目 内)カキ目	外)10YR8/2 灰白 内)7.5YR8/4 浅黄橙	やや不良	微細な白色粒子、3mm程の白色小石、灰・白色粒子含む	
第12図20	土師器	B24 遺構精査	瓶	把手部		(4.4)		把手のみ	外)指頭圧痕、ナデ 内)横方向のハケ	外)2.5V7/1 灰白 内)2.5V7/1 灰白	やや不良	1mm以下の灰白色粒子含む	
第12図21	土師器	B11 表採	甕	胴部		(14.2)		胴部1/10	外)ナデ調整 内)ナデ調整	外)2.5Y5/1 黄灰 内)N6 灰	良	微砂粒・砂粒少量含む	同図17と同一個体か
第13図1	土師質皿	B17 排水溝	皿		(11.0)	1.5		全体の1/3	外)型成形のちナデ 内)型成形のちナデ	外)10YR7/3 にぶい黄橙 内)10YR7/3 にぶい黄橙	良		灯芯油痕
第13図2	土師質皿	A24 排水溝	皿		(12.0)	1.6	6.0	全体の1/3	外)回転ナデ、糸切り底 内)回転ナデ	外)7.5YR6/4 にぶい橙 内)7.5YR7/4 にぶい橙	良		底部に糸切痕
第13図3	越前焼	表採	摺鉢	口縁部		(4.3)		1/12以下	外)回転ナデ 内)回転ナデ	外)5YR6/6 橙 内)5YR6/4 にぶい橙	良好	1mm以下の白・灰色粒子含む	
第13図4	越前焼	B25 遺構精査	甕	口縁部		(3.5)		1/12	外)回転ナデ 内)回転ナデ	外)5Y5/1 灰 内)2.5V6/2 灰黄	良好	微細な白色粒子・1mm程の黒色小石含む	内・外自然釉
第13図5	越前焼	表採	摺鉢	底部		(5.9)		1/12以下	外)ケズリ、ナデ 内)ナデ	外)7.5YR6/4 にぶい橙 内)7.5YR6/4 にぶい橙	良好	1mm以下の灰・白色粒子・3mm程の白色小石含む	
第13図6	磁器	A5 SD1	鉢	口縁部	(16.0)	(3.7)		1/12以下		外)2.5V6/4 にぶい黄 内)2.5Y7/2 灰黄	良好	緻密	灰釉 外)無釉のところに煤付着
第13図7	天目碗	A10 SR1	碗	口縁部	(11.8)	(3.3)		1/12以下	外)回転ナデ 内)回転ナデ	外)7.5YR2/1 黒 内)7.5YR2/1 黒	良好	緻密	鉄釉
第13図8	陶器	A7 SD1 (トレンチ)	皿	口縁部	(12.0)	(2.2)		1/12以下	外)口:輪花 内)不明	外)10Y5/2 赤-灰 内)10Y5/2 赤-灰	良好	緻密	
第13図9	越前焼	A4 SD1 (トレンチ)	土製円盤		3.5 (長径)	2.3 (短径)	1.5 (厚さ)		外)不明 内)不明	外)10YR5/4 にぶい黄褐 内)5YR5/4 にぶい赤褐	良好	緻密 1mm以下の白・黒色粒子含む	甕胴部片の転用か

## 4 石器

石器は石鏃1点のほか、緑色凝灰岩の原石と剥片が各1点出土したのみである。

## 石鏃（第14図1）

B22グリッド、2区SR1より出土した。完形品で長さ5.630cm、幅1.730cm、厚さ0.615cm、重さ5.300gをそれぞれ測る。石材は安山岩で、石質は緻密である。いわゆる無茎鏃で、側縁部を中心に密な両面調整が施される。基部にはほとんど調整が施されず、自然面が残るほか、一部の剥離面は摩耗して線状痕が認められる。先端部も完全には尖り出されておらず、加工途中のような印象も受ける。

## 5 金属製品

金属製品には包丁、釘、鉄鏃があるが、すべて1区SD1の近・現代攪乱部より中・近世陶磁器などとともに出土しており、近世以降の遺物と推測する。本項では遺存状態が良好な包丁1点を図示する。

## 包丁（第14図2）

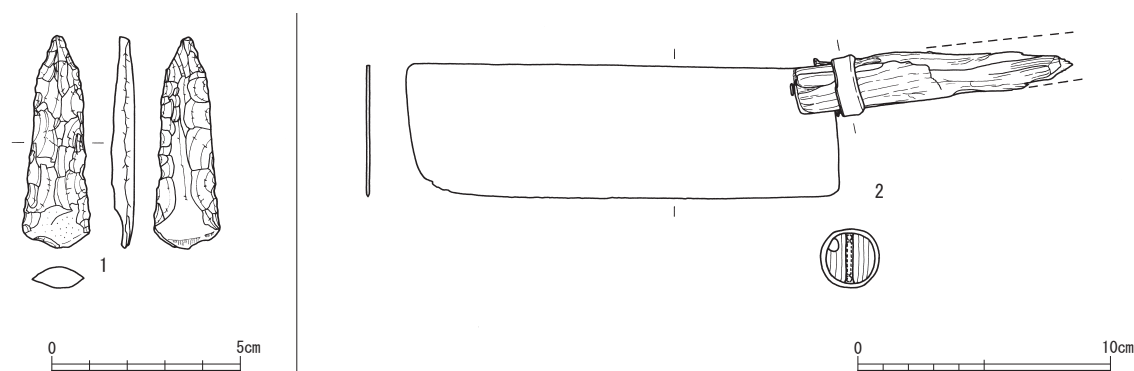
A5グリッド、1区SD1の近・現代攪乱部より出土した。いわゆる菜刀で、刃部と柄部が遺存する。残存全長26.20cm、残存<sup>みちよう</sup>身長17.10cm、<sup>みはば</sup>身幅5.20cm、<sup>みせはば</sup>身背幅0.15cm、残存柄部長11.08cm、柄部径2.30cmをそれぞれ測る。鉄製の刃部を芯持丸木の柄に差し込み、金属製の口輪を嵌めてから、若干の隙間に鉄釘を計3本埋め入れて固定している。遺存状態は比較的良好で、刃部には全体的に泥土が付着しているものの、剥離・亀裂や変形はなく、ほぼ原形を保っているが、柄部は端部が朽ちたように欠けている。

この包丁については保存処理の実施と同時に柄部分の樹種同定もおこなった。以下、その概略を記す。

包丁の柄は、広葉樹のモクレン属に同定された。日本に生育するモクレン属のホオノキ、オオヤマレンゲ、シデコブシ、コブシ、タムシバの5種は落葉低木～高木であり、木材は軽軟で加工が容易であるが、強度と保存性は低い。本資料については、材の強度よりも軽さを選択した可能性がある。

明治時代に編纂された『木材ノ工藝的利用』（農商務省山林局編1912）によれば、同じ刃物の刀剣類の柄と鞘について、モクレン属に含まれるホオノキが良いとしている。その理由として、樹液が少なく刀身に錆を生じさせる恐れが少ないこと、晩材部も柔らかく刃を引くことがないこと、よく乾燥した木材でも割裂しないことなどを挙げている。

包丁の柄の用材については、全国の類例ではスギやヒノキなどの針葉樹を利用する例が多く見受けられる（伊東・山田編 2012）が、本資料によって刀剣類の柄や鞘の用材に良いとされるホオノキを含むモクレン属も同じ刃物の包丁の柄に使われていることが判明したことになる。



第14図 石鏃・包丁実測図（縮尺：石鏃1/2、包丁1/3）

## 参考文献

伊東隆夫・山田昌久 編『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社 2012年  
農商務省山林局 編『木材ノ工藝的利用』大日本山林會 1912年

## 第4章 まとめ

今回の調査成果から、本遺跡は基本的には縄文、弥生、古代、中・近世の各時代に展開した集落跡と理解できる。遺構は1・2区を通じて自然河川や溝が主体であり、これは過去の調査成果<sup>(1)</sup>ともある程度は一致するが、井戸やそれに類するような大型の土坑は数少なく、掘立柱建物や柱列などの構造物も抽出し得なかった。したがって、今回の調査区は基本的には集落の居住域から外れた縁辺部と考える。

遺物については、土器のほとんどが磨滅・劣化した状態にあることや、自然河川や溝が遺構の主体を占めること、近・現代以降の攪乱や削平を被っていることなどを考慮すれば、その多くは周辺他所から後世に流入した可能性が高い。加えて出土量自体が非常に少ないため、遺構遺物の出土事例は実にわずかであるが、それらについて遺構の所属時期を検討する。

縄文時代については、晩期の土器が比較的多く得られたものの、すべて破片資料でしかも自然河川や溝からの散発的な出土であり、明確に遺構に伴うような状況は確認できなかった。弥生時代については、中期の土器が出土した2区SK6・10と、玉作り関連遺物である緑色凝灰岩の原石が出土した2区SK12については弥生時代の土坑と見なして良いだろう。古代については、土師器や須恵器（第12図2・3・7・8・14・19）がまとまって出土した2区SD2が古代の溝と判断できる。中・近世については、1・2両区のSR1が近世～近現代の同一の自然河川と推測するのみである。

一方、遺構の内容や分布状況に注目すると、2区SR2以南が自然河川と比較的大きめの溝が数本程度なのに対し、以北は大小様々な溝と土坑・ピットが多数集中しているのが大きな特徴である。これに前述した各時代の様相などを考え合わせ、各地区の性格を考察する。

まず、SR2以南については、自然河川やそれに関連する用排水路としての溝が分布するものと推測する。複数時期の溝が重複している可能性が高いが、それ以外の遺構がほとんど認められないことから、その地勢や性質は各時代を通じてほとんど変わることがなかったものと考ええる。

対して、SR2以北は弥生時代の土坑が複数認められることや古代以降の遺物が全く出土していないことから、基本的には弥生中・後期に限定して営まれた集落の一部と考える。遺跡の周辺地形を見ると、南北方向を主とする旧河川の流れて自然堤防など小規模な微高地が点々と分布していたと推測される（第3図）が、東西方向を向くSR2はそのような微高地を区切る形で流れていたことになる。SR2出土遺物が全くないので確実な時期は不明だが、おそらくは弥生時代末以降の河川の氾濫によりSR2以北の土地は埋没し、それ以降は居住地としては機能しなかったものと考ええる。

結論として、SR2以南と以北はともに集落の縁辺部ではあるが、溝が主体であるという以外に共通点がほとんど見出せない。両区の違いは単に時期的問題だけではなく、それらが付随する集落本体が異なっており、その違いを反映している可能性も考慮すべきであろう。

### 註

1 平成21年（2009）の調査では弥生時代と古代の溝、中世の井戸などを検出した（野路編2014）。平成22年（2010）の調査では平安時代の溝のほか、中近世の井戸を多数検出した（青木編2013）。いずれの調査区も今回の調査区の近隣に位置する。

### 参考文献

青木隆佳 編『大関東遺跡・上蔵垣内遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第139集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2013年  
野路昌嗣 編『上蔵垣内遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第151集 同 2014年



# 写 真 图 版





(1) 1区南半部全景 (南より)



(2) 1区北半部全景 (南より)



(3) 2区12・13グリッド全景 (北より)



(4) 2区14～19グリッド全景 (北より)





(1) 2区 20～27 グリッド全景 (北より)

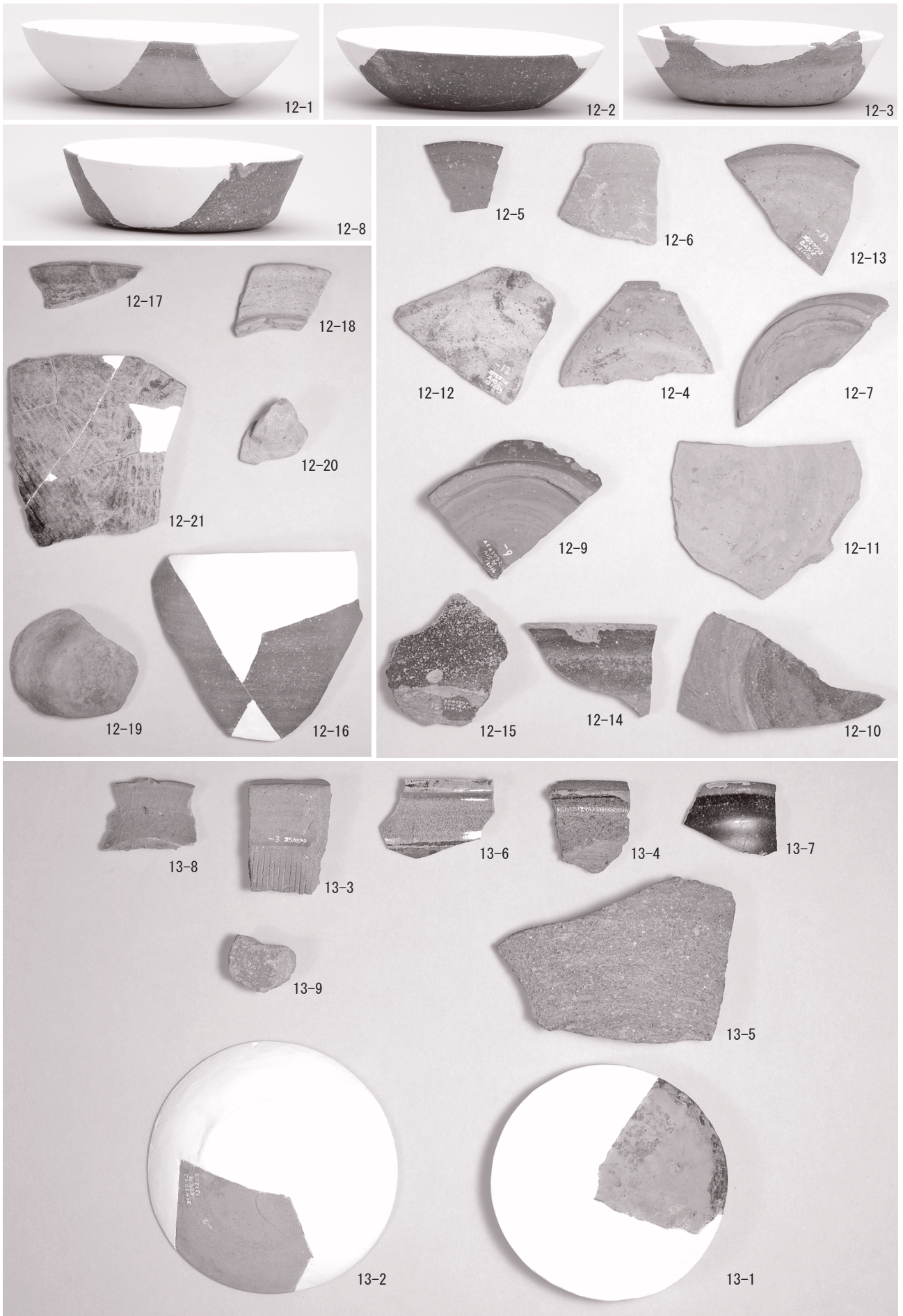


(2) 2区 28～35 グリッド全景 (北より)



(3) 3区全景 (北より)

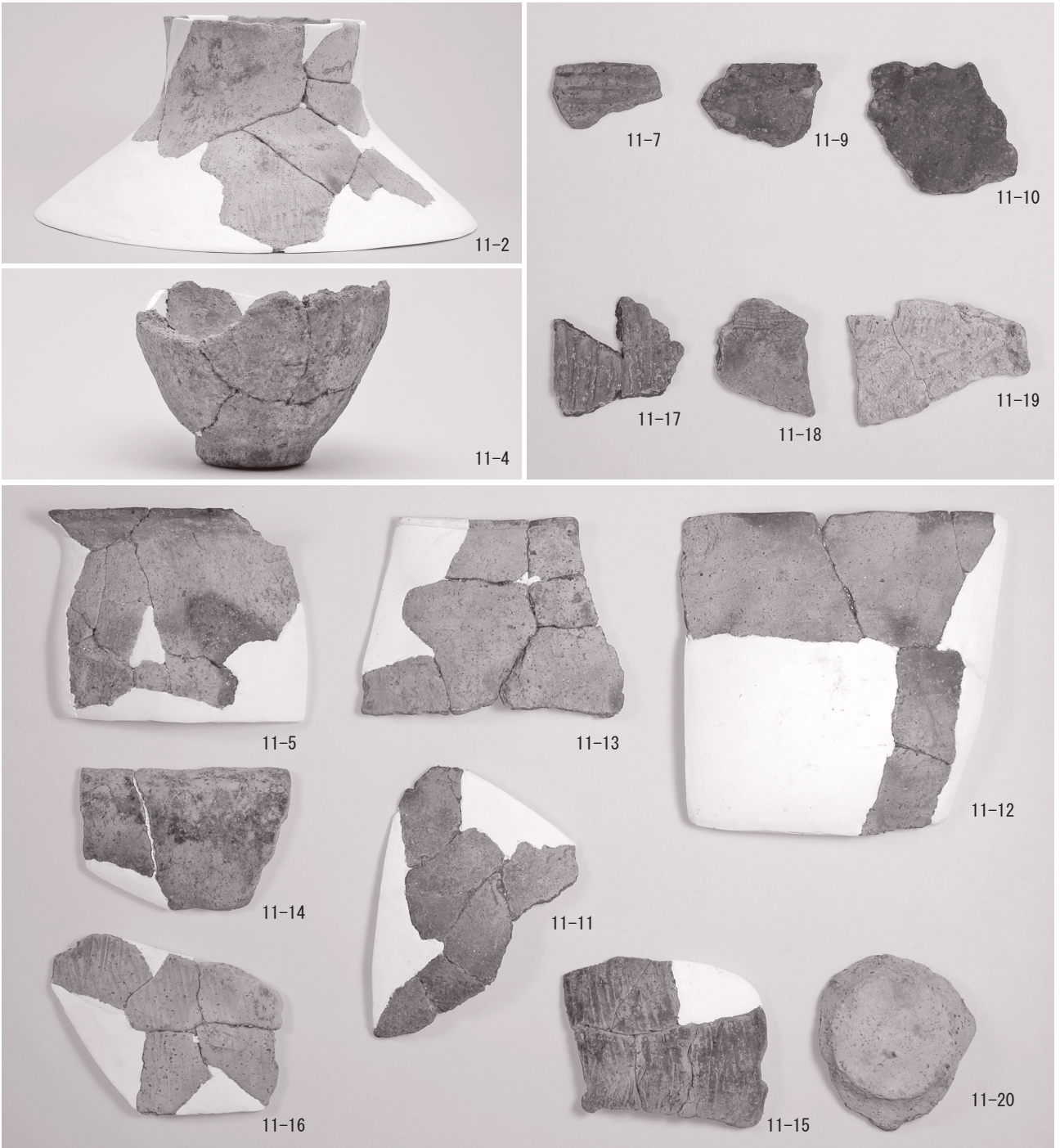




土師器・須恵器・土師質皿・陶器・磁器



図版第四 遺物（土器・石器・金属製品）



(1) 縄文土器・弥生土器



(2) 石鏃

(3) 包丁

報告書抄録

ふりがな	かみくらがいちいせき							
書名	上蔵垣内遺跡							
副書名	県営かんがい排水事業 東江地区に伴う調査							
巻次								
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第164集							
編著者名	中森敏晴 赤澤徳明 山本孝一							
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 Tel : 0776-41-3644							
発行年月日	西暦2017年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみくらがいちいせき 上蔵垣内遺跡	ふくいけん 福井県 さかいし 坂井市 さかいちょう 坂井町 ごほん 五本・ かみぜき 上蔵	18210	11040	36° 10' 40"	136° 13' 35"	20131101 ～ 20131227	1,330 m <sup>2</sup>	記録保存
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上蔵垣内遺跡	集落	縄文晩期 弥生中・後期 古代 中世 近世	自然河川 溝 土坑・ピット	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 中・近世陶磁器 土師質皿(近世) 包丁(近世以降)		自然河川と溝が主体。		
要約	<p>上蔵垣内遺跡は縄文・弥生・古代・中世・近世の各時代に展開した集落跡である。遺構は自然河川とそれに関連すると見られる用排水路としての溝が主体であるが、居住遺構がほとんど検出されなかったことから、基本的には集落の縁辺部であったと考える。</p> <p>調査区は遺構の内容や様相などから、自然河川を境界として北半部と南半部とに大きく分けられる。南半部は複数時期の自然河川や溝が重複していると見られ、それ以外の遺構がほとんどないことから、その地勢は各時代を通じてほとんど変わることがなかったと考える。対して、北半部は弥生時代に限定して営まれた集落の一部で、おそらくは河川の氾濫により埋没し、それ以降居住地としては機能しなかったと考える。この北半部と南半部の様相の違いは、単なる時期的問題だけではなく、付随する集落そのものの違いである可能性もある。</p>							

---

福井県埋蔵文化財調査報告 第 164 集

## 上蔵垣内遺跡

－ 県営かんがい排水事業 東江地区に伴う調査 －

平成29年3月1日 印刷

平成29年3月22日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒910-2152 福井市安波賀町4-10

印刷 足羽印刷株式会社

〒918-8231 福井市問屋町3丁目212

---